

事を詩や歌に作つたものは澤山あり申す。

織女牽牛雙扇開、年々一度過河來。

天の川遠さわたりにあらねども、

君が船出は年にこそ待て。

淺からぬちぎりと思ふ天の川、

あふせは年に一夜なれとも。

七夕のながさ思ひも苦しきに、

此の瀬をかぎれ天の川浪。



●九重の御消息

●親王御降誕 竹の園生の御榮 いやが上にも生

ひ茂らせ給ふ事、めでたしともめでたし。皇太子

妃殿下には 先月二十五日午前七時三十分御分娩

第二皇孫殿下御降誕、兩殿下とも此上なく御健祥

に在らせらるゝ御由、當日は、妃殿下の御誕生日

に當らせらるゝとは、目出たきが上にも目出たき

御慶事と申し奉る外なし、尙

●御命名式日 は七月一日御舉行あらせらるゝ趣

にて當日は宮中皇靈殿賢所神殿に於て奉告の御

祭典を行はせられ、天皇陛下より御命名の御次第は勅使を以て東宮御所に御通知相成るべしとの御事なり。(六月二十五日謹記)

●各宮殿下御避暑地 皇太子殿下を始め奉り、各宮殿下には本月十日より廿日頃の間にて何も御避暑せられ、次第なるが、其御地割は左の如く御治定相成たり。

- 皇太子殿下 日光田母澤御用邸
- 迪宮殿下 函根宮の下御用邸
- 常宮殿下 日光朝陽館の御用邸
- 周宮殿下 日光朝陽館の御用邸
- 富美宮殿下 函根宮の下御用邸
- 泰宮殿下 函根宮の下御用邸

●皇后宮行啓 皇后陛下には先々月三十日、雨中をも厭はせられず上野公園内に開設中なる東京府教育品展覽會へ行啓遊ばされしが當日、陛下には幾千の兒童の手に成る製作品を綿密にみそなはされ、屢々御褒詞を賜はりたる由にて、千家知事

は左の如く御沙汰書を認め同會に傳達したりといふ。

御沙汰書

- 一、圖書習字等は毎郡區の陳列場に於て、少くも一綾分を御覽遊されたり。
- 一、裁縫品陳列の場所に於て知事より同一のもの、み多數ある旨申上たるに、品物は一樣なるも裁縫したる兒童は異なるに付、能く見ればならぬとの御沙汰あらせられたり。
- 一、當所の陳列場に於て知事より小笠原、八丈、大島其他の教育の模様を申上たるに、深く御目を留めさせられ、當所の教育も斯くまで進歩せしや、誠に喜ばしき事なりとの御沙汰あらせられたり。
- 一、雨中多數の生徒奉迎せるを御覽遊ばされ、此の雨中に可愛想なりとの御沙汰あらせられたり。
- 一、御覽後、斯く兒童の學藝進歩する様教授する教員の苦心盡力は容易の事にあらざる可しとの御沙汰あらせられたり。

●學びの窓

●女子高等師範學校 先月二十一日午後一時第二回如蘭會談話音楽体操部々會を開きしが、中々の盛會にて、各部とも其進歩頗る見るべきものあり

りたりとの事なり ▲附屬高等女學校の談話會は同日
じき十一日開會せりとのこと ▲教授三輪義方氏の
代はりに尾上八郎氏今回、唱歌教授を囑托せられ

たりといふ ▲来る十一日より本校附屬校園とも、
夏期休業となるべしとの事なり ▲久しく保育囑托
として幼稚園の爲めに力を盡されし羽田晴子氏は
病氣の爲め先月囑托を解かれたりとの事。

●東京府立第一高等女學校 淺草七軒町に新築
すべき同校は目下敷地の地均中なるが、八月まで
には工事を落成すべき見積なりといふ、校舎は普
通教室十五個特別教室五個を設け、全校六百人の
生徒を收容するに足るべき設備を爲す筈なりと。

●女子美術學校別科 本郷弓町なる同校にては
今般苦學生の爲めに別科を設け、特に授業料並に
材料費を免除して志望の技藝を修めしめ、傍ら學

校の製作品を製作せしむる規定にて、修業年限は
二年、目下造花編物蒔繪の三科に限り、各十名づ
ゝ募集中なりと云ふ。

●家事専門女學院の開設 家事科教育専門の目
的を以て今回小石川區白山御殿町百七番地に假事
務所を設けらる。同院は目下尙は假開設に過ぎざ
れども、教授法の精確と懇切とを主として、家政
上須要なる教育の爲めに、大に盡すところあるべ
しといふ。

●女囚攜帶乳兒保育會 今回板垣伯其他有志者
に由て創立されたる同會は事務所を女子同情會
館内に設置し、廣く婦人間の賛成を求めて可憐な
る攜帶乳兒を底保し乳養の道を開かん目的なりと
いふ。

●夏期講習會 女子の爲に開く夏期講習會に付

きでは乞ふ本誌廣告につきて承知せらるべし

●ヒュース嬢送別會 本月五日帝國教育會に於

て神田乃武氏ミス、ヒュース嬢を招待し、講話會

を兼ねヒュース嬢の送別會を開く由。

●動物虐待防止會 今回知名の諸士の發起によ

りて組織せられたる同會は假事務所を芝區高輪北

町五十三番地に置き、演説出版等其他の方法に依

りて目的たる動物虐待の悪習を矯正せんとし、毎

月十五日を以て例會を開く定めなる由、發起人の

主なる人は近衛公、加納子、井上、元良、南條、

村上の諸博士福島安正、瀧澤榮一、辻新次等の諸

氏なりと

●女學生獎學金候補者 我が女學生の爲め米國

有志婦人の創立したる獎學金により既に二回の留

學生を派遣したるが、今回又第三回目の募集に際

し試験科目を設けて有望の女子を選抜し、來春早
々波米の途に就かしむる由、詳細の事は麴町元園
町一丁目女子英學塾に於て尋ねべしとなり。

●萬國郵便聯合紀念祝典 萬國郵便聯合加盟廿

五年紀念の祝典は先月二十日午後三時帝國ホテル

に舉行せしが、出席者二千餘名、當日小松通信局

長は郵便電信取扱人にして廿五年以上勤續の者

三百八十名の總代に賞品目録を授與したりといふ

●大日本婦人教育會常集會 は去卅一日午後一

時半より永田町華族女學校幼稚園内に於て開會、

立教女學校校長本田増次郎氏の『歐州に於ける婦人

地位の變遷』につきて及び法學博士松波仁一郎氏

等の演説ありたりとの事なり

●虎列刺病の襲來！ 恐るべき虎病佐賀縣に發

生して既に又東都に襲來せり。其筋の調査によれば佐賀縣にては先月二日初發、臺灣にては先々月七日初發せし以來、去廿四日までに各縣に於ける同病患者の數を擧ぐれば、佐賀縣下四十七内死亡二十六、長崎縣三内死亡二、臺灣其他十二内死亡五、合計六十一内死亡三十三なり。

東京より (六月廿五日)

擊 水 生

▲蕭然たる一室の南の窓を明け離して、山に河に立ち昇り立ち消ゆる霧の中より、杜鵑の雨を衝いて一聲殘し行くを眺むるなど、詩想涌然として自ら起る五月雨の空、山川の里は萬に趣深かるべき今日此頃、都は打つて變つての殺風景、打ち續く梅雨中に市中は一面の泥田と變じ、大地にヌキ足し

て行く光景、詩想も何もあつたものに無之候。

▲夏向きに相なり候て、又々改良服の時季は來り候。併し打ち見たる所、昨年あたりの改良服はどうやら失敗に終り可申様覺えられ候。子供は一体何を著させても似合ひ申候へ共、大人となると左は參らず、某女學校の改良服も一向引立ち申さず候。目慣れぬ故可笑しきなりと申し候へども、元來一見して、飛び付く程でなくては到底流行は致し申さず候。何とかよき趣向ありたきものに候。

▲先月來讀賣新聞のはがき集に、小學校生徒の衣服近來著るしく華美に流れたりと、中々八釜しく議論有之候。或は事實可然と存じ候。併しながら一般社會の奢侈に流れ候事は、近來著るしき事實に候。兒童の美服云々はつまり之が影響に候。先づ父兄自らより矯止せでは叶ふまじくと存じ候。

▲恐ろしき虎刺拉病佐賀を襲うて、昨今東都にも此處彼處侵入し來り候。歐人は此病をば野蠻病と申し候とか、其心は野蠻人はど衛生思想に乏しく衛生思想に乏しき程、流行する病氣なればとの事に候。要するに一人の不衛生より一國其災害を受ける事に候へば此際、各自一入の攝生こそ專一と存じ候。

▲一昨年は子歲にてべすとの流行を見、昨年は丑歲にて鷄口瘡の侵入あり、本年は即寅歲なれば虎刺拉の襲撃に出遭ひ候。來年の卯歲にはさて何病の御見舞にかと申し居り候。

▲夏期休暇目前に迫りて、都下幾百の學生夫れと歸装に忙はしく候。清楚なる山水の間に起臥して自然の純美に心を洗ふこと數句命の洗濯日はまことに此時期に候。さりながら多少規律的生活に

慣れ來りたるものを、久々にての歸省に「よく來た、よう歸つた」と四方八方父母親戚朋友からの歡迎の爲めに、吾れ知らず攝養の法を失ひ、反つて身体を損することはこれ迄小生どもの實驗し來りし處に候。殊更本年の如きは一層の注意肝要に候。

▲當地目下何の風情も無之候。東洋寫真會は寫真術熱心の素人の會にて先月廿二日まで開かれ、頗る好評を博し候。教育品展覽會も種々の風評の下に先月五日閉會致し候。

▲淺草の花屋敷の象は相變らず健在にて、種々の藝を演じ候。ラツバも吹き候。碁磐乗も致し候。御辭儀も致し候。巨大な身体をもて余しながら、どこまでも可愛き彼は子供の大喜びに候。上野動物園の獅子も健全に候へども、あはれ、六尺四方

の小天地に踞踏して徒らに昔日の壯圖を憶ぶ面影
髻髻として眉間に往來する様をゆる不憫に候。早
々

●地方通信

●札幌女子學生寄宿舎 本道女子の教育も、時
勢と共に進歩し、殊に昨今高等女學校設置せられ
てよりは女學生の當地に遊學するもの多し、然れ
ども未だ適當の寄宿舎なきにより、今回保護監督
法を立て、假寄宿舎を設けられたり。

●婦人協會例會 帝國婦人協會は六月七日午後
一時より女子高等小學校にて例會を開き、西川か
め子の米國談、撫養院長の衛生談、金森通倫の演
説などありてなかくの盛會なりき。

●北海道聯合教育大會 來る六月廿三日より札
幌區北海道教育會に於て開かるゝ筈なるが、本道

教育會より提出せる女子教育に關する問題は如左
女子師範學校を道廳府縣に必ず設立せられんこ
とを其筋に建議すること。

女生徒の體操教員は男女何れを可とするか。

●地方費補助の命令 北海道教育會は去る四月
廿二日付を以て、北海道廳長官より金千圓の補
助を得たれば、同會は四百圓を小學校教員講習會
費に、參百圓 圖書編纂費に、參百圓を圖書館費
に配當せり。

●六月の北海道 梅雨の候、濃霧山をこめて
鬱陶敷、山又山の樹々も青葉繁り、炎帝の駕を迎
ふるも今三句を出でざらん乎。

海外彙報

●英杜戰爭の結末 殆んど三年間續けられたる

英杜戰爭は左に示すが如くにして遂に局をハベリ

千八百九十九年十月十一日

千九百二年六月一日

戰爭終る

戰爭繼續の期間
二ヶ年七ヶ月二十日間

英軍戦死者
士官一千六十三人
兵卒二千一千三十八人

英軍傷病者
士官三千三十人
兵卒七万六百五十二人

杜車戦死傷病者
捕虜となりてセントヘレナ、セーロ

ンベルムダ等に送られたる杜軍
英國が費したる軍事費
十二億五千万弗

●阿非利加に於ける諸國の領地
南阿の兩共和

國英國の有に歸したる以來、阿非利加に於ける諸

強國の領土の面積は左の如くなりと云ふ。

英領地 二、七一一、九一〇平方哩

佛領地 三、八〇四、九七四

葡領地 七九〇、一二〇

西班牙 一六九、一五〇

獨逸 九三三、三八〇

伊太利 一八八、五〇〇

而して阿非利加に於ける獨立國の面積は總て一、

四九一、〇〇〇平方哩にして其内九〇〇、〇〇〇

平方哩はコンゴ自由國の面積なりと云ふ。

●英皇戴冠式の御延期
先月二十六日を以て、

舉行せらるべかりし英國皇帝戴冠式は、陛下御

不例の爲め突然延期せらるゝ事となりし旨、其前

日のルートル電報は傳へ來れり。我が皇室より

も直様御見舞の御親電を發せさせ給ひし由なるが

此大典の延期に付さて、皇帝の御遺憾は申すまで

もなく、世界に於ける幾多英國國民の失望左こそと

察せらるゝなり。

新刊 紹刊

▲女訓のしをり 全一冊

三輪田眞佐子著

著者女子教育に従事すること既に三十年。公務の餘暇、或は雜誌に演説に教育上の意見を公にせられたるもの甚多し。本書は即ち之等の意見を訂正して優美なる一綴とし刊行せられたるもの、熱心の情公平の見、句々躍然として紙面に溢る。學生は言ふに及ばず、苟しくも女子教育にたづさばる人には一讀三讀の價值は確に

之あるべし(發行所東京日本橋區通り一ノ一九、大倉書店)

▲小學女子遊戯法 全一冊 伊藤成子編

尋常一年より高等四年に至るまでに別ちて遊戯を排列し、凡そ百二十種之材料を撰擇せり。編者は女子高等師範學校の卒業生にて今現に同校附屬小學校に實地授業に従事せらる。未だ精進せざれども其適切なるは疑なかるべし。(定價五十錢發行所東京本郷森川町一育成會)

▲料理講義錄 發行所

東京日本橋區鈴木町十一大日本割茶學會

石井泰次郎氏主任となりて編輯せるもの、先月五日前期第一號を發行せり。載する所日用惣菜より始まり實際料理、茶事懷石、儀式料理諸菜切方支那料理西洋料理等最懇篤に併かも簡明に講述しあり、其他食堂心得料理雜話料理實疑等有益の文字極めて多し。家庭及學校教育上、頗る庖厨の業の重要視せらるゝに至りたる今日此講義錄の出版せられたる、誠に時期に適應せるものさいふべし(會費、入會金三十錢 一ヶ月二十錢)

會 報

●第廿五常會 明治三十五年六月七日午後一時

三十分左の順序により、女子高等師範學校附屬幼稚園に於て開會せり

一、開會の辭

二、唱 歌 保姆合唱の歌

三、演 說 橋梁の觀察 野口保興君
古代の保育法 下村三四吉君

四、唱歌、遊嬉

五、隨意談話

遊嬉は女子高等師範學校會員より提出せる花賣并に舌切雀を練習せり次て隨意談話に移り、閉會せしは午後四時三十分、來會者は會員四十餘名、同伴者十數名招待員二名なりと。

寄 附

一金參圓也

右臺灣國語學校長田中敬一君より本會に寄附せられたり。謹んで厚意を謝す。

入 會

東京の部

- 小石川區茗荷谷町八一 笠井梅野
- 本所向島中ノ門町拾五番地 一色豊
- 神田區三崎町二八一 小岩五
- 市ヶ谷山伏町二〇 川島庄一
- 京橋區南小田原町一ノ一 伊藤真

地方の部

和歌山縣和歌山市廣瀬中ノ丁一ノ五半田方

東京府豊多摩郡落合村近衛家奥

横濱市南太田町二一四五

栃木縣足利町三丁目

栃木縣足利町昌平町

朝鮮元山津

東京府南千住町一

東京府南千住町字南三

群馬縣女子範學校

府下北豊島郡元金杉日暮里一一二七

府下南千住二十番地

改姓

福地 岸高くま

轉居

北海道札幌高等女學校へ

越後國南蒲原郡加茂町雜田内へ

東京市赤坂區新坂町六へ

同牛込區赤坂下町八三龜岡方へ

東京府下豊多摩郡澁橋町元山箸七三八辰村源藏方へ

同

香川縣三豊郡觀音寺町觀音寺女兒(尋常高等)小學校へ

利光しづ	河崎きよ	服部綱子	荒井昌三	山口保三郎	龜谷なる	吉田金太郎	小沼たま	山高幾之丞	御園生よそ	星野わか	佐藤ゆき	佐藤ゆき	佐藤ゆき	關千秋	淺岡はま	師岡伸	脇屋なほ	脇屋よし	大西永太郎
------	------	------	------	-------	------	-------	------	-------	-------	------	------	------	------	-----	------	-----	------	------	-------

鳥取縣氣高郡美穗村大字下味野村近藤寛次郎方へ

岐阜縣高等女學校へ

京都市伏見町丸太町下る

京都下京の場通室町東入へ

下谷區谷中初音町四ノ一三二へ

横濱西戸部四七二末吉方へ

清國牛莊日本領事館

會費領收 自明治三十五年五月二十六日 至全 六月二十五日

一金壹圓七拾錢	自三十四年	至三十五年	五月
一金五拾錢	自三十五年	至三十五年	八月
一金壹圓	自三十五年	至三十五年	七月
一金五拾錢	自三十五年	至三十五年	四月
一金六拾錢	自三十五年	至三十五年	四月
一金壹圓二拾錢	自三十五年	至三十五年	九月
一金壹圓二拾錢	自三十五年	至三十五年	十二月
一金壹圓二拾錢	自三十五年	至三十五年	四月
一金壹圓二拾錢	自三十五年	至三十五年	三月
一金五拾錢	自三十五年	至三十五年	三月
一金壹圓	自三十五年	至三十五年	九月
一金壹圓	自三十五年	至三十五年	六月
一金三拾錢	自三十五年	至三十五年	六月
一金五拾錢	自三十五年	至三十五年	八月
一金五拾錢	自三十五年	至三十五年	四月

石谷いし子	坂 さき	波多野 あぐり	八阪さだ	酒井 冬	佐和山たか	瀬川さも	本多 蝶	岸高くま	藤江富佐子	雨森 銅	三須 利	里村なほ	神林てい	大津まん	齋藤鹿三郎	黒田定治	須藤つれ	手塚不二夫
-------	------	---------	------	------	-------	------	------	------	-------	------	------	------	------	------	-------	------	------	-------

婦人さごも第二卷第七號

一金壹	一金五	一金七	一金三	一金壹	一金三	一金壹	一金壹	一金拾	一金拾	一金拾	一金拾	一金拾	一金拾	一金拾	一金拾	一金拾	一金拾	一金拾	一金拾
圓	錢	錢	圓	圓	錢	圓	錢	錢	錢	錢	錢	錢	錢	錢	錢	錢	錢	錢	錢
自三十五年四月	自三十五年六月	自三十五年十二月	自三十五年四月	自三十五年六月	自三十五年七月	自三十五年七月	自三十五年七月	自三十五年七月	自三十五年七月	自三十五年七月	自三十五年七月	自三十五年七月	自三十五年七月	自三十五年七月	自三十五年七月	自三十五年七月	自三十五年七月	自三十五年七月	自三十五年七月

八坂さだ	若林みつ	永田らく	横山まき	吉田金次郎	小沼たま	小池みつ	渡邊すみ	藤岡さき	小林ふじ	宮崎もと	山田せん	根來まさ	相川みね	岩田ゆき	富田八千代	内田たれ	木村寅	高木なみ	安東てい	村井あ	赤江よ
------	------	------	------	-------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	-------	------	-----	------	------	-----	-----

一金二拾	一金壹	一金三	一金二	一金五	一金壹	一金三	一金壹圓二拾錢	一金三	一金六	一金九	一金三	一金壹	一金五	一金六	一金七	一金五	一金五	一金五	一金五	一金五	一金五
錢	圓	錢	錢	圓	錢	錢	錢	錢	錢	錢	錢	圓	錢	錢	錢	錢	錢	錢	錢	錢	錢
自三十五年五月	自三十五年六月	自三十五年七月	自三十五年七月	自三十五年七月	自三十五年七月	自三十五年七月	自三十五年七月	自三十五年七月	自三十五年七月	自三十五年七月	自三十五年七月	自三十五年七月	自三十五年七月	自三十五年七月	自三十五年七月	自三十五年七月	自三十五年七月	自三十五年七月	自三十五年七月	自三十五年七月	自三十五年七月

平野みよ	近藤はま	成瀬きよ	近水さし	脇屋なほ	三田利徳	山田ちよ	大竹みさほ	澤ぬひ	千葉ひで	岡田ちよ	柴岡照	星野わか	石川石	石山ひさ	矢野ふさよ	内田かれ	稲葉かれ	後藤りん
------	------	------	------	------	------	------	-------	-----	------	------	-----	------	-----	------	-------	------	------	------

一金壹圓	一金壹圓	一金壹圓八拾錢	一金二拾錢	一金壹圓	一金壹圓	一金壹圓五拾錢	一金壹圓二拾錢	一金七拾錢	一金壹圓二拾錢	一金二圓	一金六拾錢	一金三拾錢	一金五拾錢	一金六拾錢	一金二拾錢	一金二拾錢	一金五拾錢
自三十四年四月	自三十四年四月	自三十四年四月	自三十四年七月	自三十四年七月	自三十四年七月	自三十四年七月	自三十四年九月	自三十四年九月	自三十四年九月	自三十四年九月	自三十四年九月	自三十四年九月	自三十四年九月	自三十四年九月	自三十四年九月	自三十四年九月	自三十四年九月
至三十五年一月	至三十五年一月	至三十五年一月	至三十五年一月	至三十五年一月	至三十五年一月	至三十五年一月	至三十五年一月	至三十五年一月	至三十五年一月	至三十五年一月	至三十五年一月	至三十五年一月	至三十五年一月	至三十五年一月	至三十五年一月	至三十五年一月	至三十五年一月

山口西三郎	下村三四吉	高羽ふみ	新免義勇	星つね	吉村ちづ	田邊なか	小林千代	荒井昌三	野村すぎ	大塚さだ	鈴木てる	柳井つる	小岩ふい	一色さよ	近藤茂	永田よし	青木せい	大橋いね
自三十四年三月	自三十四年三月	自三十四年三月	自三十四年三月	自三十四年三月	自三十四年三月	自三十四年三月	自三十四年三月	自三十四年三月	自三十四年三月	自三十四年三月	自三十四年三月	自三十四年三月	自三十四年三月	自三十四年三月	自三十四年三月	自三十四年三月	自三十四年三月	自三十四年三月
至三十五年三月	至三十五年三月	至三十五年三月	至三十五年三月	至三十五年三月	至三十五年三月	至三十五年三月	至三十五年三月	至三十五年三月	至三十五年三月	至三十五年三月	至三十五年三月	至三十五年三月	至三十五年三月	至三十五年三月	至三十五年三月	至三十五年三月	至三十五年三月	至三十五年三月

市川源三	野澤あい	松村ひさ	林ふみ	長谷川阿喜	小谷野千代	小谷野かれ	土川五郎	野尻てつ	神通せき	岡本たか	丸山さめ	岩本ふく	岡田ふみ	岡田みつ	利光しづ	廣瀬銀
自三十四年三月	自三十四年三月	自三十四年三月	自三十四年三月	自三十四年三月	自三十四年三月	自三十四年三月	自三十四年三月	自三十四年三月	自三十四年三月	自三十四年三月	自三十四年三月	自三十四年三月	自三十四年三月	自三十四年三月	自三十四年三月	自三十四年三月
至三十五年三月	至三十五年三月	至三十五年三月	至三十五年三月	至三十五年三月	至三十五年三月	至三十五年三月	至三十五年三月	至三十五年三月	至三十五年三月	至三十五年三月	至三十五年三月	至三十五年三月	至三十五年三月	至三十五年三月	至三十五年三月	至三十五年三月